

がぶくしゅー

本書の著者は協同組合短期大学および中央協同組合学園等において長らく教育に携わり、協同組合に関する多数の著書・訳書・論文を書かれていた研究者である。その著者が高齢にもかかわらず（大正五年生まれ）このような刺激的な題をつけた本書を著したのは、協同組合について世の中にはいまだに多くの誤解がある現状を残念に思っていることであろう。

著者によるとそのような誤解の原因は、一つは農協の特質としてテキストや講習で語られることの中に多くの間違いがあることである。そしてもう一つは、複雑微妙な協同組合の特質を研修などにおける、時たまの講義や短期間の勉強で理解させようというのがそもそも無理なことである。そこで本書は、協同組合の特質の中で誤解や間違いが目立つ六項目について正していこうというのである。こつした協同組合の特質あるいは本質について世の中で誤解されることが多いというのは協同組合関係者としては困ったことだと思うが、逆にいえば本書を読めば協同組合の本質がある程度理解できるということになるであろう。

以下、著者のいう協同組合についての六

つの誤解について、簡単に紹介していこう。
その一「競争は悪？」

協同組合の世界では、しばしば「協同は善、競争は悪」と考えがちだが、その考えは間違っていると著者はいう。協同の中にはマフィアや談合のような悪いものもあるし、協同組合の活動ももたれあいになれば、その積極的成果は期待できない。他人への配慮を持ち、全体の善に貢献する、開かれた協同が大切である。逆に競争は人間にとって自然なことで、協同組合にとっても組合員の利益を増進するための競争はむしろ

「協同組合 六つの誤解」

藤澤光治著（全国協同出版）

奨励すべきだ、という。

その二「非営利だから利益ゼロ？」

協同組合は営利を目的とした事業を行ってはならないとされる。しかし設備投資や運転資金に当てるために、事業に利益を求めることは協同組合にとって不可欠である。非営利ということは、利益がなくてもよいということとは違うのである。

その三「『原点』は古い？」

協同組合は一般にはロッチデールから生まれた協同組合原則を守っていることから、協同組合の原点をロッチデールに求めがち

だが、協同組合にはいくつもの流れがあり、ロッチデールはその一つに過ぎないという。また、日本の農協の原点は一般に、ドイツのライプアイゼンとされるが、著者によればライプアイゼンの活動の本命はあくまで信用事業であり、総合事業を営む日本の農協全体の原点ではありえない。

残りの三つの誤解についての議論は、紙幅の関係でごくごく簡単に紹介するにとどめよう。その四「運動」はたてまえ？「では協同組合にとって運動の意味を、その五「教育と研修は同じ？」では協同組合における教育の重要性について、そして最後のその六「価値」は値打ちのこと？」では協同組合が重視すべき価値について世の誤解を解くべく説明している。

さて、本書を読んだ感想だが、「なるほど」と思われるところが多い。さすがに協同組合教育に長年携わってきた著者だけに、協同組合に関わる多くの人がどのような点を誤解しているかあるいは十分に理解していないか良く分かっているのであろう。本書はページ数も少なく、記述もきわめて平易なので、容易に一読できる。本書を読むことによって協同組合関係者が抱えている疑問のいくつかが解決されるとしたら、紹介者としてうれしいことである。

（二〇〇二年一月、一〇五頁、一、〇五〇円）

（須田敏彦）